歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第８回〕　口腔がんについて②

監修／歯学博士　鹿島　健司

前回に引き続いて、口腔がんについてのお話をさせていただきます。前回同様、今回も供覧する写真は全て当歯科医院で発見されたもので、患者さんの主訴は通常の歯科疾患（むし歯や歯周病）に関することで、口腔がんが発見されたのはたまたまということになります。

写真１　口腔底がん（58歳男性）

写真２　放射線治療後の口腔内

写真１は多数のむし歯があるといって来院された症例ですが、下顎の歯肉と舌の間に口腔底がんが見つかりました。初代貴ノ花関が罹患したのが、この口腔底がんで、こんな部位にもがんができるのかと思われた方も多いかと思います。この患者さんの場合、大学病院の口腔外科に紹介したところ、重度の糖尿病をはじめ種々の全身疾患が発見されたため、外科的な治療の前に、まずは放射線治療が選択されました**（写真２）**。

写真３　下顎のがん（77歳女性）

歯の動揺を主訴に来院されたのが**写真３**で、下顎の歯肉がんと診断して大学病院の口腔外科に紹介しました。病変が下顎の骨にまで浸潤していたために、病変部の除去とともに下顎の骨を切断してチタンプレートで固定する手術が行われました。**写真４**はそのＸ線写真です。

写真４　プレート固定された下顎骨

写真５　顎骨中心性がん（83歳女性）

写真５は右下の歯肉の腫れを訴えて来院されたケースです。歯周病との鑑別診断にちょっと戸惑いましたが、下顎骨のがんによる腫脹と診断して大学病院に紹介しました。

口腔がんの治療法は、通常のがん治療と同様、(１)手術療法、(２)放射線療法、(３)化学療法、の３種類があります。多くの場合、外科的な手術が選択され、進行したがんに対して手術療法や放射線療法と併用して化学療法が用いられることが多いようです。また、最近では放射線療法の一種である陽子線（粒子線）療法といって、がん細胞をピンポイントで消滅させてしまう新たな治療法が注目を集めています。審美性や機能保存の目的から、口腔がんでは特に優れた効果を発揮するため、今後さらに適応範囲が拡大され、より有用な治療法となりうることが期待されます。

口腔がんの患者さんからは、「口の中にがんができることを知らなかった」、「近くにそのような病気に罹った人がいなかった」と言われることが多いのですが、胃がんや肺がんに比べれば、口の中は直接目で見て触れることができるので、初期のうちに発見しやすいはずです。

現在の日本では２人に１人ががんを患い、３人に１人ががんで死亡しています。口腔がんで亡くなる方が急増していることから、日本歯科医師会では口腔がん検診事業の推進について種々の検討を始めています。しかし何といっても信頼できる“かかりつけ歯科医”を持つことが大切で、むし歯や歯周病だけでなく、お口の病気全般について定期健診を受けることが重要です。

監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年１月生。かしま歯科医院院長。
川口歯科医師会学術部長　日本大学兼任講師